エピソード0　プロローグ

天楽町では、最近、謎の誘拐事件が頻発していた。どこが謎なのかと言うと、もはや何から何まで謎であった。犯人は皆目不明な犯行手口で若年層から中年層の男女を誘拐し、人知れぬどこかへと連れ去る。そして、身代金を要求するわけでもなく、交渉に利用するわけでもなく、その一週間後くらいに誘拐された当時そのままの状態で被害者を解放してしまうのだ。

誘拐された被害者は悉く、犯人の顔、また、犯行当時から解放に至るまでの記憶を失っており、姿形でさえ覚えていなかった。犯人の顔、犯行手口、犯行動機、全てが闇に包まれていたのだ。

被害者が記憶を失っているという共通項から警察は全ての誘拐事件が同一犯、もしくは同一グループ犯の手によるものだと判断し、調査を進めている。

しかし、今だ犯人の行方は知れず、顔写真を特定することすらできないでいた。マスコミはこの事件を取り挙げ、警察の無能ぶりを執拗に取り沙汰した。謎の誘拐事件は新聞や雑誌、テレビ等で話題となり、お茶の間にもその情報が伝達された。当然の如く、無責任なデマ情報が横行した。犯人は宇宙人であるとか、夢遊病の新種であるとか、神隠しによって異世界に連れ去られていたとか、荒唐無稽な噂が大衆の間を行き交った。これほどの騒ぎになればさすがに犯人も警戒するだろうと警察は高をくくっていたが、果たしてそんなことは全くなかった。謎の誘拐事件は依然として継続した。皆目不明な犯行手口で、犯人は無差別な誘拐を敢行し、その一週間後くらいに解放する。まるで誘拐自体を目的としているかのように、犯人は誘拐を続けた。騒ぎはさらに大きくなった。警察はさらに全力を尽くして犯人の後を追った。だが、彼らの努力も虚しく、犯人は一向に割れなかった。まるで雲を掴むような闘いであった。

犯人は一体誰なのか――

それはこの町に住む一人の美少女だけが知っていた。

誘拐事件の犯人、〇校二年生の小野原　来夢（おのはら　らいむ）だけが知っていた。

「んん～～～～！　むぐぅぅ～～！！」
男の呻き声が薄暗い部屋に響き渡る。彼は全身に汗を滲ませながら藻掻きに藻掻き、その場からの脱出を図った。だが、彼の体は全く動かなかった。それも当然のことである。なぜならば、彼の顔面には小野原　来夢の生尻があったからだ。
「……」
来夢は黙したまま、顔面騎乗を続けた。清楚な制服姿で顔面騎乗するその姿は蠱惑的な魅力に満ち溢れていた。彼女の顔には微笑が表出されており、男の苦悶する様子を楽しんでいるということが見て取れた。
来夢は自らの肛門を彼の鼻先に押し当てた。そして、軽く力んだ。
「……んっ」

ぶすっびぃぃ～～！

来夢のお尻の窄まりから強烈な臭いを発する特濃ガスが放たれた。オナラだ。彼女は男の鼻先で放屁をしたのだ。硫黄を濃縮したような痛烈な一撃は否応なしに彼の鼻腔に吸い込まれていく。そして、その悪臭で以て彼の脳みそを揺さぶった。

「んぐぅ～～～～～！！　んむぐがぁぁぁぁぁつ！！」

男は悪臭に悶えて大きく暴れる。彼自身、その行為によって来夢の責めから解放されるとは全く思っていなかったのだが、それでも暴れざるを得なかった。彼女のゼロ距離放屁は彼にとって、生命の危機に瀕するほどの凄まじい威力であったのだ。全身が痙攣し、無意識の躍動を引き起こす。
来夢は妖艶な微笑を湛えながら彼の暴れっぷりを観察していた。
「……うるさいですよ？」

ぶしゅぅぅ～～～ぷぅぅぅぅ～～！

「ぎゃばぁぁぁぁあつ！　ばぁぁぁぁぁあ！」

間髪を入れず次のオナラが男の鼻に注ぎ込まれる。先刻の放屁よりもさらに濃厚な臭いであった。硫黄と便臭をぐちゃぐちゃに混ぜ合わせ、それをさらに熟成させて甘ったるさを加えたようなとんでもない激臭である。男は野太い悲鳴を上げながらさらに大きく暴れる。彼は汚染されていない新鮮な空気を求めるが、来夢のお尻に埋もれている以上、彼の願望は棄却されたも当然であった。彼女のお尻から解放されない限り、彼女のオナラの臭いを吸引し続けるしかないのである。

「ごめんなさい、私のオナラ、臭かった？……でも、あなたはこの臭いが大好きなんですよね？　だってほら……」

来夢は男の股間を見つめた。

「あなたのチンポ、ビンビンですものね」

彼女はそう言って再び放屁した。

ブバッブビィィィ〜〜〜〜！　ぶすぅぅ〜〜〜〜！

「むぐ、うあぁぁぁぁぁぁぁぁ！　あぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

来夢の放屁に合わせて男のペニスは大きく痙攣する。彼の鼻が受容する臭気は並々ならぬものであるはずだ。失神寸前に陥るほどの激臭ガスであるはずだ。しかし、彼のペニスは大きく大きくそそり立っていた。先端からは我慢汁がだくだくと溢れ、その興奮具合を如実に顕現していた。男は放屁に苦悶しながらも同時に性的興奮を得ていたのだ。もはや言い逃れはできない状態であった。

「うふふ、おチンポそんなに膨らませて。女子〇生のオナラに興奮してるんですね。……この変態」

バッフゥゥゥ〜〜〜〜！　ぶぶぶむぅぅぅ〜〜〜〜！

「あ、あああ、あああ。むぐぅうあああ、ああ、ああああ……」

罵声と共に毒ガスと形容すべきオナラが降り注ぐ。耐え難い臭気を放つ汚風は彼の鼻を執拗に蹂躙し、濃厚なオナラ臭を焼き付ける。
度重なる放屁によって体力を削られたためか、男の挙動は少しずつ弱まり、また、声も掠れ始めていた。しかし、それと反比例するかのように彼のペニスは大きく膨らみ、小刻みに痙攣していた。射精寸前であることは一目瞭然であった。
そのことを敏感に察知した来夢は舌なめずりをする。
「あら、もう出ちゃいそうなんですね。白いおしっこ、お漏らししちゃいそうなんですね。全く、女の屁だけでこれだけ興奮するようになっちゃうなんて。オナラの臭いで射精する変態マゾ豚。本当に気持ち悪いですねぇ。このままじゃ社会に顔出しできたものじゃないですね」

ぶすびっ　ぶぶっぶしゅぅぅ〜〜〜〜〜！

「むがぁ、ぐ、ががぁ〜……ぎ……」
「ほら、さっさとイっちゃってください？　オナラだったらいくらでも出してあげますよ。ぴゅっぴゅぅぅ〜〜って、ザーメンを飛ばして？　ほら、ぴゅっぴゅ〜〜〜〜って」

ぶびっ　ぶすびっ　ぶりっびびぴぃぃ〜〜〜〜！

「あぐ、うあっ、あああ、うあっ」
「……」

ぷぅ〜ぶっぶぅぅぅぅ〜〜〜〜！　ぶっしゅぅぅぅぅ〜〜〜〜！

「あう、ああ……うぐぅあ……」
「……」

ぶっすぅ！　ぶっぶぴぶぅぅぅ〜〜〜〜！

来夢は何度も何度も男の鼻先にオナラを浴びせかける。彼女の肛門から放たれるオナラはまさに無尽蔵で、休息を与える間もなく次から次へと噴射された。彼女の臭すぎるオナラは彼女のお尻と男の顔面の隙間から漏れだし、室内に充満し始めた。

当然その臭いは来夢の鼻先を掠めることになるのだが、彼女はその臭いを物ともせず、むしろ嬉々として自分のオナラを嗅ぎ、その臭さにうっとりするのであった。

やがて――

ぐぎゅるっぴぴ〜〜くりゅぎゅぐぐぅ〜〜〜〜

「あ……すっごいの……出そう……」

来夢のお腹からおぞましい音が鳴り響く。まるで獣の唸り声。しかし、そこから姿を現すガスは獣を遥かに上回るほどの獰猛さを兼ね備えているのだ。

「いきますよ……一欠片も残さず全部吸い込んでください……んんっ！」

来夢は思いっきり力み、肛門を開いた。その瞬間――

ぼりっびびびぃぃぃ〜〜〜！　ぶすびっぴぶぶぅぅぅぅ〜〜〜〜！

バフッブスッビびぃピぃぃぃィ〜〜〜！　ぶりずむっっびびぴぃぃ〜〜〜〜〜〜！　ぼしゅぅぅぅぅ〜〜〜〜〜〜〜！

来夢は体内の腐敗ガスを一息で捻り出した。嵐のような放屁が猛然とした勢いで男の鼻腔に充満する。彼女のオナラはその獰猛な破壊力で以て男の脳内を真っ黄色に染め上げていく。硫黄臭、便臭のみならず、ニンニク臭、キムチ臭、チーズ臭、腐肉臭等々様々な悪臭がミキサーのように混ぜ合わされ悪臭の坩堝と化していく。濃厚なオナラ臭が部屋中に撒き散らされる。

「むがぁァあ亜あ〜あああァァあァァ嗚呼！！！！」

男はその中心で最後の叫び声を上げる。そして、彼は地獄の苦しみの中でとうとう――果てた。

びゅっぴゅぅぅぅ〜〜〜どぴゅっどぴゅぴゅっぴゅぅぅぅぅ〜〜〜〜

男はペニスを大きく躍動させながらありったけの精を解き放った。ゼリーのような質感の濃厚な精液は、凄まじい勢いで亀頭から噴出され、**ぴゅるるっ、ぴゅるるっ、**と高々と立ち上った。その様子はさながら強力な水鉄砲のようであった。精液は瞬く間に飛散し、来夢の顔にすらかかった。彼女の美しい尊顔を白く汚した。

射精の快楽と激臭による苦しみが交互に男の意識を蝕み、まさに天国と地獄の反復移動であった。その目まぐるしい回転に耐え切れるはずもなく、やがて、彼は白目を剝いて気絶した。意識を喪失させながらも彼のペニスは小刻みに痙攣し、射精管に残った精液の残滓を放出する。オナラの臭いに包まれながら情けなく射精する男の姿は、この上なく滑稽であった。

やがて、最後に白い涙を流し、男の長い射精は終わりを告げた。来夢は肌についた精液を指で掬うとピンク色の舌で舐めとった。そして、満足気に微笑む。

「あ〜あ、シコシコもしてないのに、オナラだけでびゅるびゅるイッちゃうなんて。あなたもこれで変態の仲間入りですね。ま、これも私の調教のおかげかな？　んふふっ」

来夢はそう言って射精ショーを終えた男の顔面から立ち上がる。そして、白目を剥きながら気絶している全裸の男をまじまじと眺めた。腕を組みながら彼女は思案する。

「う〜ん、どうしようかなぁ。この人もそろそろ飽きてきたし、もうこれ以上調教のし甲斐もなさそうだし……そろそろ新しいオモチャに交換した方がいいかもしれませんねぇ」

来夢は可愛らしく小首を傾げ、数十秒間悩む。そして、彼女は決めた。

「よし、新しいのにしましょう。けってい！」

満面の笑みを湛えながら大きく腕を振り上げる来夢。この部分だけを切り取れば普通の美少女と何ら変わりない様子なのだが、周知の通り、彼女は普通の美少女という定義から著しく逸脱している。攫ってきた人々を自らの変態欲求の捌け口に利用するという前代未聞の変態美少女、それこそが小野原　来夢という人物なのだ。彼女の変態性癖は多岐に渡り、どれもこれもがあまりにマニアックな代物であった。自分の体内に蓄積された腐臭ガスを嗅がせるのも、彼女に性的な快楽を与える一行為に過ぎないのだ。

「ふふっ、そうと決まれば、いつもの……やっちゃわないとね……」

来夢は妖しげな微笑を浮かべると、再び男の顔面に座り込んだ。そして、お腹をぐるぐると撫で回す。

「ん、んん……んっ……」

来夢は苦しそうに顔を歪めながらそれでもお腹を撫で回す。腹部を刺激することによって腸内の蠕動運動を促進させ、ガスを急速に充填する。尚且つ、それを放出せずにひたすら我慢することによってただでさえ濃厚なオナラをさらに濃厚なものへと凝縮させているのだ。その悪臭も今までのオナラとは桁違いのものとなるだろう。

「う、ぐ……もうそろそろ、いいかしら……？」

来夢は腹部の状態を確認し、肛門が男の鼻と直結するように位置を調節する。そして――

「ん……出る、ぅ……ふんんんん――――――っ！」

ぷす……スゥ～～～～～……ぷっ、ぷすっ……ぷっすぅ、ぶすっ……

来夢の窄まりから顔を出したのは、先程のような爆音のオナラではなく、むしろその逆の、搾りかすのような微かなすかしっ屁であった。しかし、量に相反してその臭いは彼女が男を気絶させた時に放ったオナラを遥かに凌駕するものであった。様々な悪臭が入り乱れた彼女のオナラをさらに強力にしたような臭いだ。

来夢は顔を真っ赤にするほど気張り、必死にお尻を震わせながらすかしっ屁を男の鼻腔に注ぎ込む。気絶したきりピクリとも動かない男に、さらに濃厚なオナラを嗅がせていくのだ。その理由はただ一つ、彼女はあまりに強烈なオナラの臭いによってある程度の記憶を抹消す

ることができるのだ。これこそ、彼女の攫った人間が悉く記憶を失っているその原因だ。この能力は彼女だけが授かった天性の能力だと言えるだろう。
　また、来夢は他にも、腸の活動を無理矢理活発にさせて急速にガスを発生させる特技や、オナラの音を自在に操る特技を持つ。オナラに関して彼女の右に出る者はいないだろう。出ようとする者がいるとは思えないが――
「ん、んんぅぅぅぅっ！　ふんんんん――――――――！」

しゅぴっ、すぅぅ～……ぷっぷすっ……ス～～、ぶふっ……ぷっぷ

　来夢は汗を垂らし、顔を切なげに歪めながら自分のオナラを男に浴びせる。その姿は美少女であることを差し引いてもあまりに滑稽で、どこか情けない姿であった。しかし、そんなこともお構いなしに、彼女は放屁を続けた。部屋の中には卒倒するような悪臭がもうもうと充満していた。
　やがて――

しゅぴっぶすっ……すすっ……すぅ～～～……ぷすっぴぃ……

「ふぅ、まっ、こんなものかな」
　濃縮したオナラを全て放出しきった来夢は満足気に微笑み、やっと男の顔から立ち上がる。男の顔面には彼女の強烈な放屁臭がこびりついていた。細胞にまで染み付いたのではないかと危惧せざるを得ないほど、その悪臭はひどく臭った。
「これで私の記憶は綺麗サッパリなくなったはず。あとはこの人をテキトーに洗って、元の場所に戻せばオッケーっと」
　来夢は男の手を取って乱暴に引き摺る。意識と記憶を失った男はまるで人形のような扱いのまま、力なく引き摺られていく。
「さて、次はどんな子にしましょうか」
　来夢は妄想を膨らませながら微笑む。
　そして、彼女はこの薄暗い部屋を後にするのであった。